

# 主格助詞「イ」の分布について

切石文士

## On the Geographical Distribution of the Nominative Postposition “i”

BUNSHI KIRIISHI

### Introduction

The aim of this paper is to integrate some new findings with the partly modified report that was presented to the conference of the 48th Dialectological Circle of Japan in May, 1989.

Furthermore, this paper follows the thesis: “A Study of the Postposition “i” ( Nominative Case ) in the Oita Prefecture Dialect”. ( The University Bulletin, Vol 8, 1989, Beppu University Junior College )

The discussion will be confined mainly to the following two points:

1. To clarify the chronological development in the usage of the postposition “i” in Oita Prefecture
2. To consider the nationwide distribution of the postposition “i” from the viewpoint of its historical and contemporary usage

Based upon these two points, the future perspective of the research on the postposition “i” shall be made clear.

### はじめに

この研究は、日本方言研究会第48回研究発表会（平成元年5月）において発表した拙稿をもとに、それに新しく調査した結果を付加した報告である。なおこの研究は『別府大学短期大学部紀要』第8号（平成元年）所載の「大分県方言にみる主格助詞『イ』の研究」につづくものである（注1）。

この稿では

1. 大分県における「イ助詞」の使用状況の時代的推移を明らかにする。
2. 全国的にみた「イ助詞」の分布状況を、通時的、共時的に考察する。

の2点を中心に考究し、それによって「イ助詞」研究の今後の課題を明らかにすることを目的とする。

### 1 主格のイ助詞について

大分県には全国的にみても非常に珍しい方言助詞の使用がみられる（注2）。例えば

雨が降る。 {

 県南地域——アメイフル。  
 県北地域——アメグフル。

というように、共通語の主格助詞「が」に相当するところに「イ」・「グ」を使うのである（図1）。これをそれぞれ「イ助詞」「グ助詞」と呼ぶ。が、ともに現在は共通語の「が」に押されて急速に衰滅の一途をたどりつつある。（以下、イ助詞のみについてのべる）。

一方、古文獻の上では、万葉集をはじめ日本書紀、宣命その他、中古の訓読資料等に、イ助詞をみる。例えば

- 家有妹伊将爵悒（万葉集卷12・3161）
- 愷那能倭俱吾伊輔曳符枳能朋樓（日本書紀卷17）

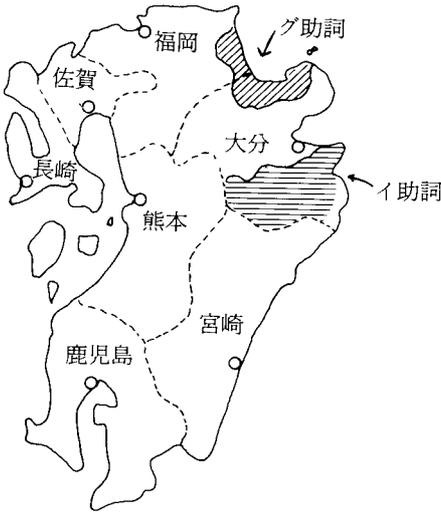


図1 主格助詞「イ」「グ」の使用地域

のように使われて、イ助詞が主格に立つ語に付いている。(『奈良朝文法史』<P421>(山田孝雄)。しかし、このイ助詞の扱いは、学者によって異説があり、必ずしも主格助詞とは限定されていない。

大分県方言のイ助詞に関しては、これまで明らかにしていることをまとめると、およそ次のようになる。

(1) 音韻的制約

- ① イ助詞の直前にくる語の末尾の音が、ア段、エ段、オ段の音(/a, e, o/)の場合、イ助詞は付きやすい。
- ② ウ段、イ段の音(/u, i/)がくるとイ助詞は付きにくい。ただし直前の音が「i」であっても、のぼすと「イ」が付きやすくなる「オーコボシガミュル(三つ星がみえる)が「オーコボシーイミュル」となりやすい。
- ③ 撥音ン(/N/)がくるとイ助詞は付かない。

このように直前にくる語の末尾の音節/a, i, u, e, o, N/によってイ助詞の付き具合が左右される(図2)。

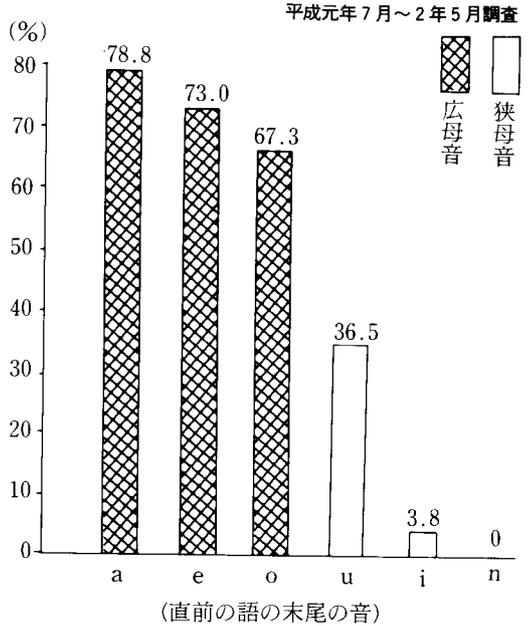


図2 イ助詞が接続する場合の音韻的制約

(2) 語彙的制約

- ① 1音節の語には、広母音であってもイ助詞は付きにくい。「絵が多い」は「エイオイー」とはいわず「エガオイー」という。
- ② 外来語、改まったことばには「イ」は付きにくい。が外来語でも身のまわり語となったものには付きやすい。「マスクイ」「タクシーイ」という(注3)。

(3) 語法上からみたイ助詞

- ① 対象格の用法がみられる。「お茶が飲みたい」を「オチャイノミテー」ともいう(注4)。
- ② 名詞、代名詞、形式名詞、準体助詞、副助詞、接続助詞等に付き、主格の機能を発揮する。

2 大分県におけるイ助詞の分布

筆者はこれまで、大分県のイ助詞に関して、次のような調査を行ってきた。

- 第一次調査 昭和27年5月～8月
- 第二次調査 昭和55年8月～9月

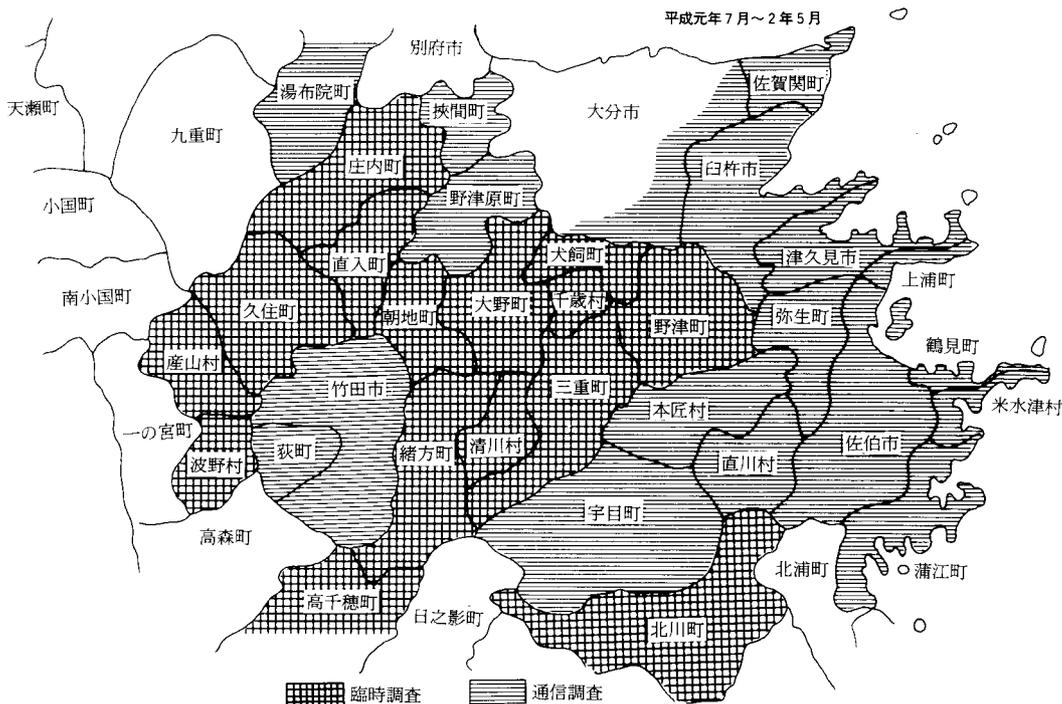


図3 第4次調査地域 —中学生対象—

第三次調査 昭和62年 8月

第四次調査 平成元年 7月～2年 5月

これらの調査結果は、それぞれ論文にして報告してきた(注1の文献等を参照)。

第三次調査までの成果は『別府大学短期大学部紀要』第8号(1989年)にまとめてあるので参照されたい。

今回の第四次調査は、大分県総務課の県史編さん班の協力を得て『大分県史・方言編』執筆のために大分県中南部のかなり広い範囲にわたって実施したものである。(質問及びアンケート調査)

この調査の概要は次のとおりである。

臨時調査 県内 9町2村(中学校11校の1,035名・高校生4校の367名)

県外 2町2村(中学校5校の92名)

通信調査 県内 5市9町3村(中学校43校の1,765名)

以上、県内外63校、合計3,259名(そのうち

中学校は59校2,892名)に及ぶ被調査者の協力を得た(図3)。

その調査結果は『大分県史・方言編』に詳しく報告したので参照されたい。

この稿ではその要約として各町村別の残存状況(図4)と調査した年次ごとの推移(図5)とを示しておく。

なお今回の調査では、イ助詞の使用地域の境界線を確認するために、初めて県境を越えて、宮崎県側及び熊本県側の地域の調査を行った。

平成元年12月、宮崎県東臼杵郡北川町及び西臼杵郡高千穂町を調査、北川町の中で、大分県南海部郡宇目町に最も隣接している下赤中学校生徒の間に「イ助詞の使用を聞いたことがある」という者が13%いたが、これは家の人等について調べてきたものもあって、必ずしも生徒自身が直接耳にした数とは限らない。この地区にイ助詞がたしかに存在するかどうかは今後の調査に待ちたい。なお他の2校北川中学校、高千穂中学校生徒の間には全くイ助詞の形跡は見出せなかった。

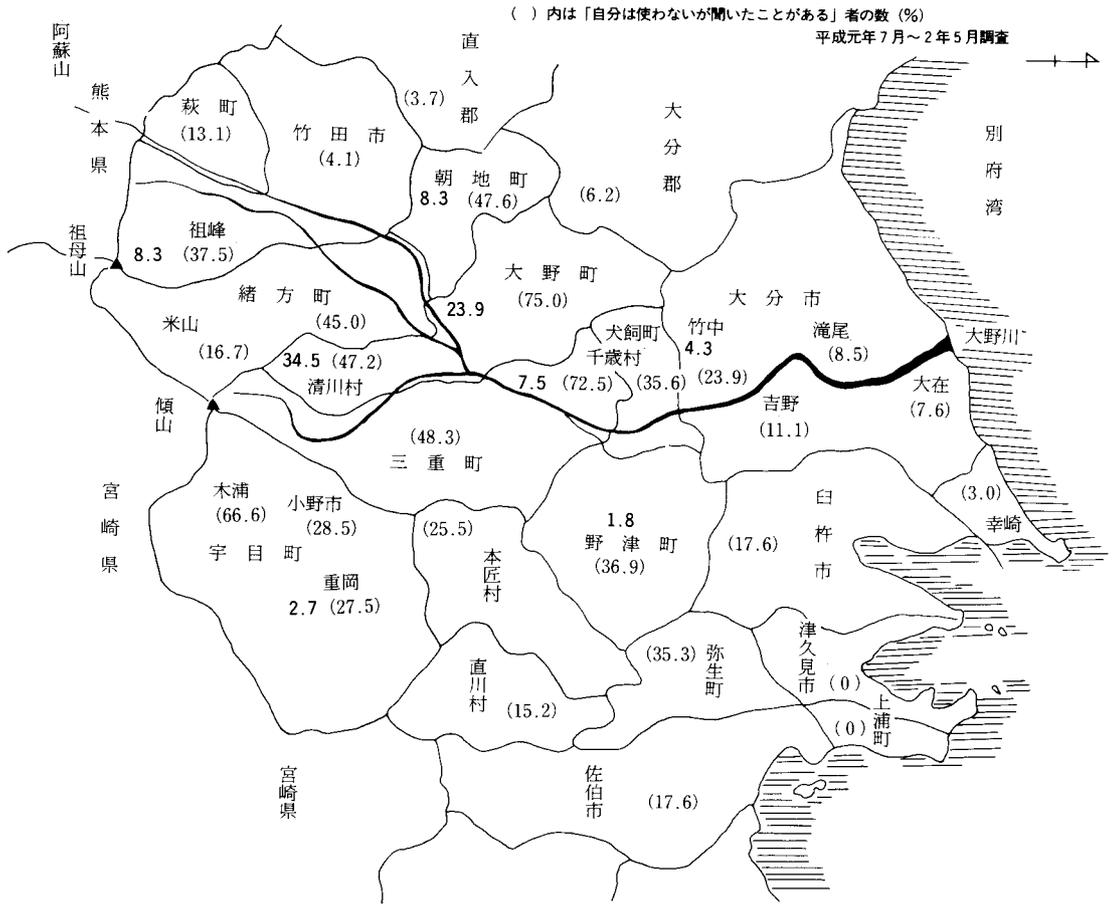


図4 大野川と周辺町村におけるイ助詞使用状況 (数字は%)

平成2年3月には、大分県直入郡久住町及び萩町に隣接している熊本県阿蘇郡産山村並びに波野村の調査を行ったが、ここも全くイ助詞の形跡は見出せなかった。村の老人にも質問調査を実施したが、イ助詞の気配すら感じられなかった。

一方、県内では、これまでイ助詞の報告がなかった庄内町の阿蘇野においてイ助詞が聞かれたという情報があった。この地の方言を調査された阿南光彦氏が、次のような形で、イ助詞を聞いたというのである。

「コゲー雨イ降ラー、ドーンコンナランデ、オヒヨリモーシューシューヤ (こんなに雨が降れば、どうにもこうにもなりませんよ。日乞いの祭をしまししょうよ)。

早速平成2年3月、庄内中学校の阿蘇野出身の寮生を調査、また寮生に調査表を持ち帰ってもらって、その家族(40代～70代の男女計12名についても調査を実施したが、筆者の調査では、イ助詞は確認できなかった。

以上の調査結果や、これまでの数々の調査を考え合わせると、イ助詞は、大野川流域を中心に分布し、大野郡、南海部郡をはじめ直入郡、北海部郡、大分郡、大分市の一部地域に今なお使用されていることが確認された(図4, 5)。

### 3 県外におけるイ助詞

では、大分県以外にはイ助詞はみられないのだろうか。

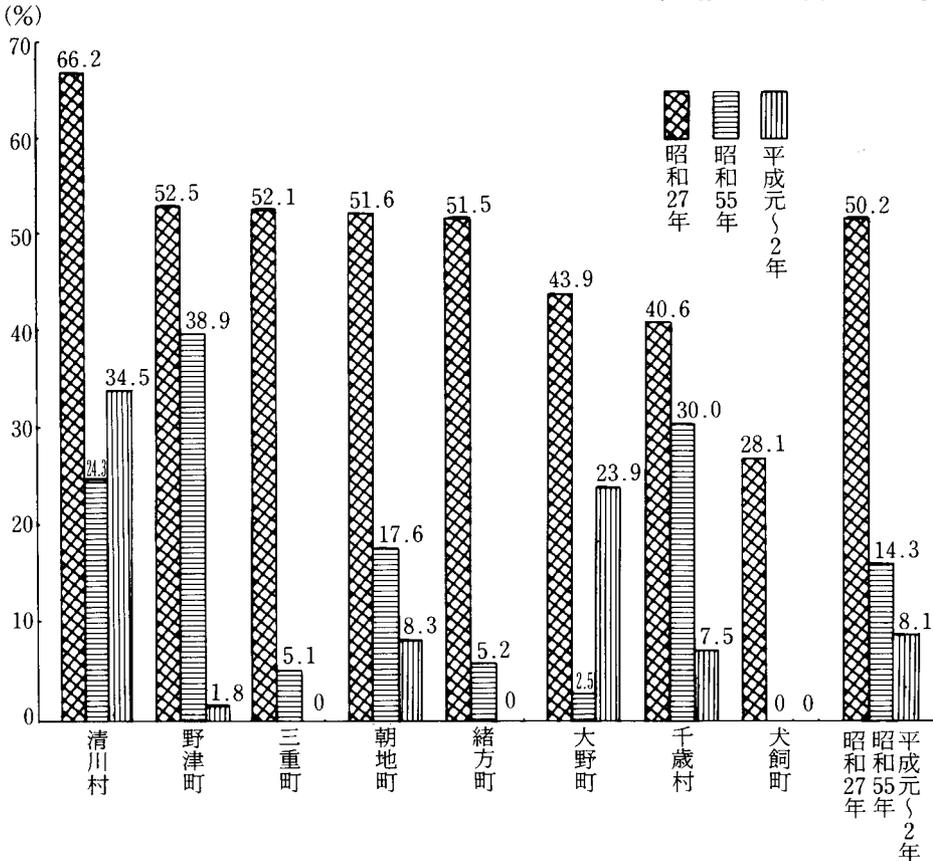


図5 大野郡内イ助詞使用率の推移 (中学生対象)

茨城県の場合

これまで大分県以外に、方言イ助詞があるという報告を聞いていなかったが、平成元年3月刊の『日本方言大辞典』上巻(小学館)には、次のような記述がある。

い〔助〕①主格を表す格助詞。が。常陸※064、高知県幡多郡「わしがくどき始めるとどひたて櫓の下あ人い出た」308、大分県大野郡「なげーのいいー(長いのがよい) 941、南海部郡「へー背板いある」038 一略一

なお補注として、「毛野の若子伊笛吹き上る」(書紀)「和気伊申してあり」(続日本紀)の例を引き、上代助詞「い」をあげている。

上記のうち、大分県関係については措くとして、常陸国(茨城県)のイ助詞をみていくと、064『新編常陸国誌』(中山信名<1836~55>) 659頁に

コハ助辞ナガラ日本紀ニ毛奈ノ若子伊、万葉ニ家在妹伊ナドアル伊に同ジク、親シム意ヲ含メリ、兄一・叔父一・児童(コドモ)一イラー、ナド云ヘリ、

とのべている。この用例の兄イ・叔父イ・児童イの「イ」の使い方は大分県方言のイ助詞と全く同じである。

なお、奥里将建『古代語新論』(三省堂、昭和18年8月)では、

現代方言圏に於いてこのイの行われている地方は、わずかに大分県の大分、大野、北海部各郡の農山村のみであって一略一といい、その勢力は常陸の国あたりまで及んでいたらしい旨を、東歌「筑波嶺のをてもこのもに守部する母己守れども魂ぞ逢ひにける」(巻14)をあげて説明し、イ助詞の残存を説いている。

また、「梅木長者物語」(『おがたの民話』

昭和61年3月)によると、常陸の国から一族を引きつけて武将が現大分県大野郡緒方町に移り住んだともある。豊後と常陸の国とは何らかの関わりがあり、あるいはイ助詞の交流もあったかと推量されるが今回の『方言文法全国地図』1.助詞編(注2)には報告がみられない。茨城県においてはすでに消滅したのかどうか、確認調査の必要が残る。

### 高知県の場合

今一つは、豊後水道を挟んで同じ生活圏とみられている高知県幡多郡大月町竜ヶ迫の報告である。地理的にみて大分県と相対しているのでイ助詞への期待が大きかったが、結論からいうと、筆者の調査ではイ助詞を確認することはできなかった。

『日本方言大辞典』の例文にいう「人い出た」の出典にあたる『全国方言資料』第8巻へき地・離島編II(日本放送協会編・昭和42年)322頁に「自由会話」として男(1890年生、農業)、女(1894生、農業)の盆踊りについての会話が記録されている。

「ワシガ クドキハジメルト ドヒタテヤ  
グラノ ヒター ドダテ ヒトイ デタ オ  
ドリガ オドレンヨーニ ナルノヤケン…  
…」(わたしが、音頭をとり始めると、どうしたって、櫓の下に、どうしたって、人が出て、踊りが、踊れないように、なるのだから……)(326頁)

幸いにこの会話は、同書に添付されたソノシートに吹き込まれていたもので、松田正義大分大学名誉教授(注5)の協力と助言を得て確認をした。確かに「ヒトイ」と聴きとれるが、この会話全体からみた場合、イ助詞が使用されているのはここ一箇所だけである。この前後をみるに、イ助詞が当然出てきてもいいと思われる箇所において、他には一度も使われていない。

男「ソレ**ガ**クドキハジメデ」(それがくどき初めで)(324頁)

男「サシカカッタシゴト**ガ**アルノジャガ」  
(さししまった仕事があるのだが)(336頁)

この場合、大分方言のイ助詞なら、「ソレ

イ」「シゴトイ」となるところである。なお問題になるのは、次の例である。

A「ソレバヒト**ガ**ヨッテナニヒタガアノトキラノオドリヤ」(それぐらい人が寄ってなにしたが、あのときなどの踊りは)(326頁)

B「アノオーケナキオオマエヒト**ガ**オルサキガノーテ」(あの大きな木をおまえ、人がいるところがなくて)(328頁)

「ソレバヒト**ガ**」のAのことばは先にあげた「ヤグラノヒター……」のことばにすぐつづいているものであり、Bのことばの「ヒト**ガ**オル」の「**ガ**」ともども「ヒトイ」となっているところである。同一人物の同一のことばに「ヒト**ガ**」が3箇所使われていながら、しかもひとつづきのことばの中に片や**ガ**イ助詞、片や**ガ**助詞というのは全く偶然としか考えられない。

要は実地調査であると、平成元年3月と同2年8月の2回、臨地調査を実施した。

まず高知県幡多郡大方町在住の『幡多方言』の研究<sup>1)</sup>で知られる浜田数義氏を訪ね、教示協力を得ることができた(注6)。氏の教示をまとめると、次のようになる。

- 1 大月町の竜ヶ迫というところは明治9年に愛媛県下灘村(現在津島町)からの移住者21戸によって開拓された漁村で、元来が高知県人ではない。
- 2 だから四つ仮名の区別ができない。現在百歳になる人なら宿毛市や大月町の老人であれば、ジとヂ、ズとヅの区別を正確に使い分ける。例えば、NHKの『全国方言資料』326頁5行目「ワシモーオナジ**ジャ**ツタノヨ」、327頁の3行目「モーア**レ**ジャツタナー」、15行目「マーオモシロカッタ**ン**ジャナ」は土佐人であればいずれも「**ヂ**ャ」となるところである。
- 3 文末助詞の「ナー」「ナーシ」も愛媛県の特徴で、高知県(幡多郡)では「**ノ**」「**ノー**ネャ」「**ノー**シ」になる。(但し宿毛付近では南予の影響を受けて「ナー」や「ナーシ」もかなり使われている)。
- 4 当人(話者)が幡多人でないことは、幡西

(宿毛, 大月)の老人がよく使う助詞「チ」がないことから明らかである。もし幡多人であるならば, 次のような話し方をするはずである。

「ワシン, クドキハジメルト, ドヒタチ, ヤグラノヒター, ドヒタチ, ヒトン, デチ, オドリン, オドレンヨーニ, ナルノヂャケン, ソレバー, ヒトン, ヨッチ, ナニヒタン, アノトキラノ, オドリヤ, ホンマニ, ミゴトヂャッターノ(ネヤ)」

- 5 話者は愛媛県津島町からの移住者の二世だが, 明治23年生まれであるからまだ純粹の南予方言を使っていたと思われる。従ってNHKの昭和37年の竜ヶ迫方言調査は, 行政区画は高知県だが高知県方言として処理する場合には, 特例とすべきである。(浜田氏自身)南予は, 昭和31年に現地調査し, 幡多方言との比較を考えたが, おそらくイ助詞はないと思う。

以上が浜田氏の見解である。筆者も『日本方

言大辞典』に高知県の例として, この一例を出しているのに愛媛県からイ助詞の報告がないところを見ると, 南予の津島町にも使用者がいないのではないかと, との疑問を抱いた。ちなみに高知県内の中村市, 大方町, 土佐清水市, 大月町, 宿毛市で計48名に質問調査をしたが, イ助詞などは全く聞いたこともないという返事であった。

第二回目の調査(平成2年8月)では, 『全国方言資料』第8巻の話者(吹き込み者)を幡多郡大月町竜ヶ迫に訪ねたが, すでに亡くなられており, その娘にあたる人(66才)にイ助詞の使用について聞いた, しかし「父がそういうことばを使っていたという記憶はない。もちろん私たちも使ってはいない」とのことであった。近所の男性(63才)宅をも訪ねつぶさに質問し, 亡き話者の思い出なども聞いたが, イ助詞の使用は全く確認できなかった。

なお, その亡き話者(吹き込み者)の父親の出生地, 愛媛県北宇和郡津島町下畑地の本家を

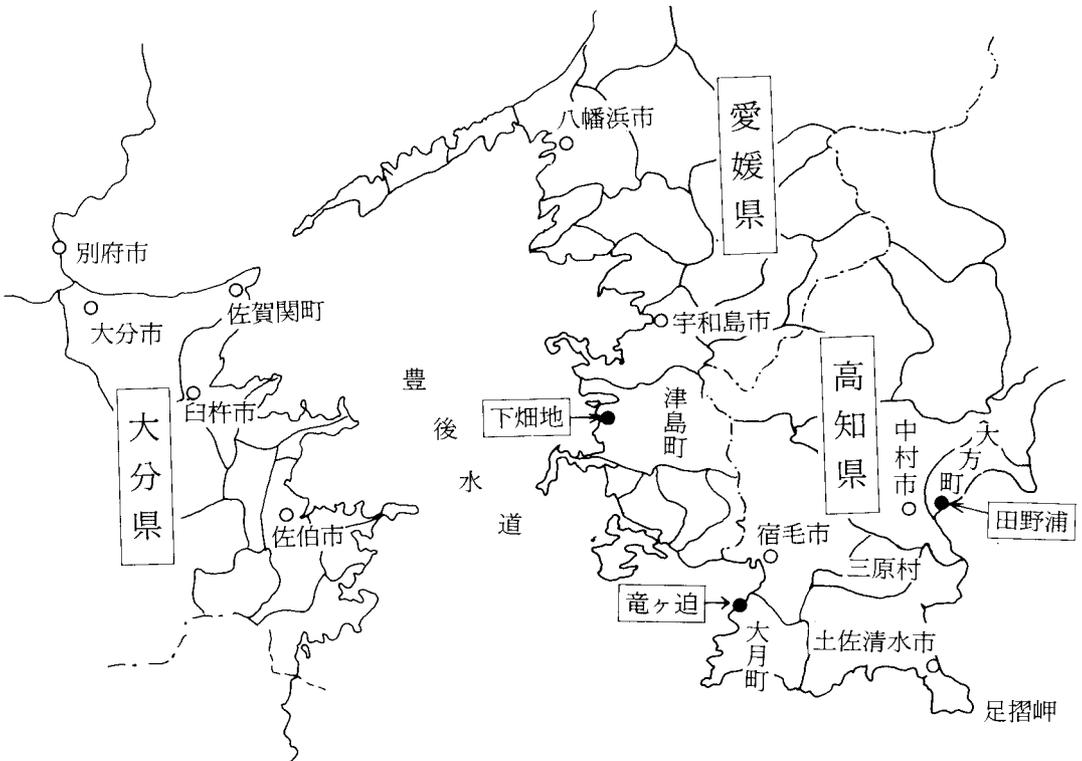


図6 四国「イ助詞」の調査地点

も津島町教育委員会社会教育課の案内により訪ねてみたが、当家の老女(75才)は「その人は私の祖父の甥になるが、イ助詞など聞いた覚えがない。誰も使う人はいない」と話してくれた(図6)。

大分県と豊後水道を挟んで対する四国愛媛県、高知県だが、筆者の調べた範囲では『全国方言資料』第8巻(日本放送協会,昭和42年)及び『日本方言大辞典』上巻(小学館,平成元年)にいう,この地域のイ助詞は確認できなかった。

### 沖縄県の場合

さらに今一つイ助詞が報告されているところは、沖縄県である。

『おもろそうし』(首里王府編,1531~1623年)の中に次のようなくだりがある。

「おとまこい,あかまこい,おかるな」(妹麻姑<妹>めが,赤麻姑<妹>めが,そいつ置きなさるな)……等

この「い」を伊波普猷氏は,格助詞として分類し,文法的解釈については助詞ヲの代理をつとめる係助詞としての機能をも認めつつ,呼格を示す助詞,すなわち格助詞としている(注7)が,外間守善氏は間投助詞と考える方がより説明しやすいと言っている。『おもろそうし辞典』には,い〔助〕の説明として,

おもろ語の「い」は,その職能からみて特示強調の意を示す係助詞と考える。一略一 本来は体言であったものが間投助詞になり,副助詞になり,さらに係助詞にまで歩を進めたものであると考えられる。

とのべている(注8)が,現在は全く使われていないようである(注9)。

筆者も昭和62年8月,那覇市,宜野湾市を中心に調査をしたが,イ助詞の残存は確認できなかった。

以上,イ助詞に関係する地域は,通時的にみれば,沖縄,常陸(茨城),大分,高地の4県とみられるが,共時的にみると,今のところ,主格のイ助詞の使われていることが確認できるのは大分県だけだということになる(図7)。



図7 「イ助詞」の分布

### 4 今後の課題

以上によって,これまでではっきりしていなかった方言の主格助詞「イ」の全国的分布が,ほぼ明らかになった。調査の結果,イ助詞が現在も使用されているのは今のところ大分県のみである。なぜ大分県にだけイ助詞があるのか,そのイ助詞の起源,正体は何か,等々は今後の大きな研究課題である。

なお茨城県並びに宮崎県境の確認調査は引き続き行っていく必要を痛感している。

今回の調査にあたり,種々教示下さった方々に厚くお礼を申しあげる。

(注)

- (1) 切石文士「大分県方言における主格助詞『イ』について」(日本方言研究会,平成元年5月)  
同「大分県方言の『イ』助詞について」(『国語の研究』第12号,大分大学国語国文学会,昭和63年11月)
- (2) 国立国語研究所編『方言文法全国地図』1助詞編(平成元年6月)
- (3) 高野滋子「大分県南海部郡方言における『イ』助詞について」大分県方言研究会,昭和61年8月)
- (4) 萩原紀子「大分県大野郡方言におけるイ助詞」(大分県方言研究会,昭和61年8月)
- (5) 松田正義『方言生活の実態』(明治書院,昭和35年9月)
- (6) 浜田数義『『幡多方言』の研究,土佐方言叢書』(方言研究同好会,1966年3月)

- (7) 伊波普猷「おもろの研究—古代国語の助詞いの用法の瞥見」(『文学』昭和10年9月, 12月)
- (8) 外間守善『日本語の世界—沖縄の言葉』(中央公論社, 昭和56年6月)  
同『おもしろさうし』(岩波書店, 昭和62年5月)  
仲原善忠, 外間守善『おもろそうし辞典, 総索引』(角川書店, 昭和53年10月)
- (9) 野原三義『琉球方言助詞の研究』(武蔵野書院, 昭和61年2月)
- 三ヶ尻浩『大分県方言の研究』(朋文堂, 昭和12年4月)
- 糸井寛一「イ助詞臆説」(『 Cholken 』第一輯, 大分大学学芸学部方言研究同好会, 昭和29年3月)  
同「主格のイ助詞について」(『大分県方言の旅』, 第3巻, 昭和33年3月)
- 松田美香「周防灘沿岸地域のグ助詞」(大分県方言研究会, 昭和63年8月)
- 日高貢一郎「山国川流域の方言」(『山国川～自然, 社会, 教育～』大分大学教育学部, 平成元年3月)

#### 参 考 文 献

- 山田孝雄『奈良朝文法史』(宝文館, 昭和29年4月)